

〔研究ノート〕

音節文字の系譜 (3)

一楔形文字から初期のインド音節 (アブギダ) 文字へー

箕原辰夫

本稿では、インド初期の文字の形成過程において、メソポタミアの周辺地域から、東部のザクロス山脈におけるエラム文字、あるいはペルシャ湾における海上交易を媒介としたインド文字への波及についての研究を紹介する。なお、原エラム線文字 (Linear Elamite script) は、インダス文字 (Indus script) との関連性が指摘されている⁽¹⁾が、両者は音節文字ではなく象形文字であると考えられるので、本稿では省略する。本稿では、まずエラム楔形文字からインドのドラヴィダ諸語の1つであるブラフイー (Brāhūī: 本稿では「ブラフイー」ではなく、「ブラフイー」と標記する。後述の「ブラフミー」との混乱を防ぐ目的がある) 語への影響があったことを示す仮説を紹介し、加えて、北西インドで形成されたカローシュティー文字 (Kharosthi script) がアラム文字から、およびインド文字の祖先とされているブラフミー文字 (Brāhmī script) は、フェニキア文字からの影響があったことを検証する。影響があった根拠として、地中海・メソポタミア・インド西部に掛けての海上交易が発達していたことを挙げる。そして、ブラフミー文字の形成と同時期に形成された南部インド文字 (タミルブラフミー文字) についても紹介していく。

1. エラム楔形文字からの波及

エラム楔形文字 (Elamite cuneiform)⁽²⁾ から、北部ドラヴィダ諸語 (North Dravidian languages)⁽³⁾ であるブラフイー語 (Brahui language)⁽⁴⁾ に対しての影響があったと捉える仮説の提唱の歴史は古く、1853年にエドウィン・ノリス (Edwin Norris)⁽⁵⁾ の論文によって提唱されており、「ドラヴィダ諸語」という名前を提案したロバート・カルドウェル (Robert Caldwell) によっても、更なる証拠が挙げられている⁽⁶⁾。エラム語から北部ドラヴィダ語の共通祖語として、エラム-ドラヴィダ諸語 (Elamo-Dravidian languages)⁽⁷⁾

(1) Gregory L. Possehl, "The Indus Civilization: A Contemporary Perspective. Rowman Altamira," p. 131, ISBN 9780759101722, 2002.

(2) https://en.wikipedia.org/wiki/Elamite_cuneiform

(3) https://en.wikipedia.org/wiki/Dravidian_languages

(4) https://en.wikipedia.org/wiki/Brahui_language

(5) Edwin Norris, "Grammar of the Bornu or Kanuri Language," London: Harrison & Sons, St. Martin's Lane, 1853.

(6) Robert Caldwell, "A Comparative Grammar of the Dravidian Or South-Indian Family of Languages," Asian Educational Services (Reprint of 1913 3rd-edition revised by Reverend J.L. Wyatt and T Ramakrishna Pillai). ISBN 978-81-206-0117-8, 1856.

(7) https://en.wikipedia.org/wiki/Elamo-Dravidian_languages

という仮説言語がデーヴィッド・マカルピン (David McAlpin) によって提唱されている^(8, 9, 10, 11)。これを拡張して、フランクリン・サウスワース (Franklin Southworth) が原ドラヴィダ語および原エラム語とあわせた原ザクロス語の存在を提唱している⁽¹²⁾。この仮説に拠れば、インダス文明を継承した原ドラヴィダ語の話者である民族が、イラン高原などを經由してザグロス山脈西側のエラムとの交流があった (エラム-ドラヴィダ諸語による) が、アーリア民族の南下により、多くは南インドに移住 (南ドラヴィダ民族・半島ドラヴィダ民族: Peninsula Dravidians⁽¹³⁾ と呼ばれる) したが、西に移動したブラフイー語を話す民族が孤立して残り、現在に至ったのではないかということである。そのため、ブラフイー語の話者のいる地域と、その他の南ドラヴィダ諸語の話者のいる地域は、図1に示すように非常に離れている。

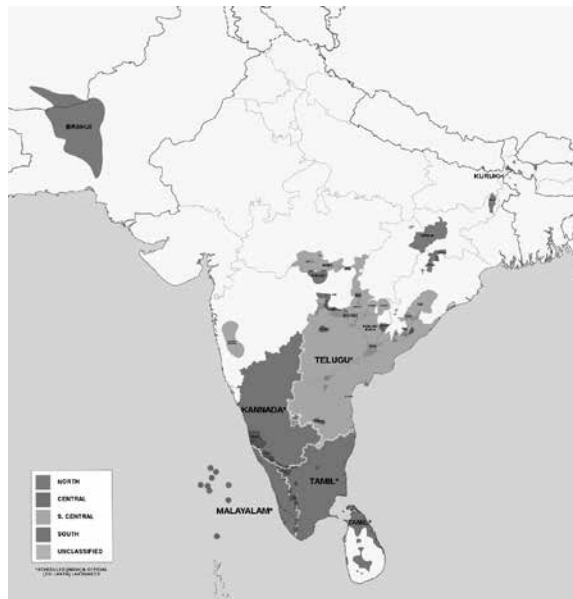


図1 ドラヴィダ諸語の話者の地域分布⁽¹⁴⁾

- (8) David McAlpin, "Toward Proto-Elamo-Dravidian," *Language* vol. 50 no. 1, 1974.
- (9) David McAlpin, "Elamite and Dravidian, Further Evidence of Relationships," *Current Anthropology* vol. 16 no. 1, 1975.
- (10) David McAlpin: "Linguistic prehistory: the Dravidian situation," in Madhav M. Deshpande and Peter Edwin Hook: "Aryan and Non-Aryan in India, Center for South and Southeast Asian Studies," University of Michigan, Ann Arbor, 1979.
- (11) David McAlpin, "Proto-Elamo-Dravidian: The Evidence and its Implications," *Transactions of the American Philosophical Society* vol. 71 pt. 3, 1981.
- (12) Franklin Southworth, "Rice in Dravidian," *Rice*. 4 (3-4): 142-148. doi:10.1007/s12284-011-9076-9, 2011, <https://thericejournal.springeropen.com/articles/10.1007/s12284-011-9076-9>
- (13) David McAlpin, "Velars, uvulars, and the North Dravidian hypothesis," *Journal of American Orient Society*, Vol. 123 (3), pp. 521-546, 2003.
- (14) https://en.wikipedia.org/wiki/Dravidian_peoples#/media/File:Dravidian_map.svg

この仮説の問題点は、エラム文字が流通していた時代およびその時代以降に、この地域の話者が文字としてエラム語あるいはブラフイー語の記録を残してこなかったことにある。現在少数残されているブラフイー語の話者は、第2言語として話しており、また、ここ100年の間に、ブラフイー語はアラビア文字あるいはローマ字のアルファベットで記述されるようになった経緯がある。紀元前1800年頃から始まり紀元前1000年頃まで続くアリア人の南下の前、すなわち紀元前2000年頃まではエラム文字、あるいは楔形文字など何らかの文字が使われていた筈なのであるが、そのような証拠が残っていないことが言語上だけの比較・類似に終わっている理由になっている。おそらく、現在のブラフイー語の話者がいた地域では、メソポタミアのように粘土板に記述する方式が採られなかったことに起因するのではないか。また、紀元前1000年以降孤立したとしても、ブラフイー語を記したエラムの後期楔形音節文字や古代ペルシャ帝国（アケメネス朝）の音節文字が見つかるのもよさそうなものである。あるいは、アラム文字がこの地域に流通していたのであれば、アラム文字を用いてブラフイー語や原ドラヴィダ語を表わした碑文があっても良いと思われる。今後、この地域でマカルピンやサウスワースが提唱しているような原ドラヴィダ語の碑文や粘土板などが発見されることを期待したい。

2. 海上交易を介しての文化の伝播

メソポタミア文明は、初期のシュメール王朝・アッカド王朝の時代から、陸だけでなく、海上を介しての交易ルートがインドまでであることが知られている⁽¹⁵⁾。海上交易（maritime trade）によって、インド半島西部まで、メソポタミアやエラムの言語や音節を基調とする文字が伝播していた可能性がある。この海上交易は、アッシリア・バビロニア期を経て、インダス平原においてブラフミー文字が成立する紀元前後の時代のペルシャ帝国においても盛んであったことが推察される。

図2の地図を見ても判る通り、陸上の交易路では、3000m級の高さのザクロス山脈・ヒンドークシュ山脈南西部の峠を越してイラン高原・カンダハル平原を経由する。それよりも、ペルシャ湾・アラビア海を経由する海上路から、現在のパキスタンの沿岸都市カラチあるいはインダス川河口を経由して、舟でインダス川を北上する交易路・インダス川に沿って移動する陸上の交易路の方が、物資を運びやすかったのではないかと推測される。メソポタミア文明とインダス平原にある文明との交流は、古代文明（Indus Valley Civilization）のときから始まっていたとの主張がある⁽¹⁶⁾。特に、シュメール期のメソポタミアの時代から、ペルシャ湾沿岸あるいはインド半島西部のアラビア海沿岸との海上交易が行われていた証拠として、交易に使われた船が記された円筒印章が見つかることが報告されている^(17, 18)。

(15) Christopher Edens, "Dynamics of Trade in the Ancient Mesopotamian "World System", "American Anthropologist New Series, Vol. 94, No. 1, 1992, pp. 118-139.

(16) Jane R. McIntosh, "The Ancient Indus Valley: New Perspectives," Santa Barbara, California: ABC-CLIO, 2008, ISBN 9781576079072.

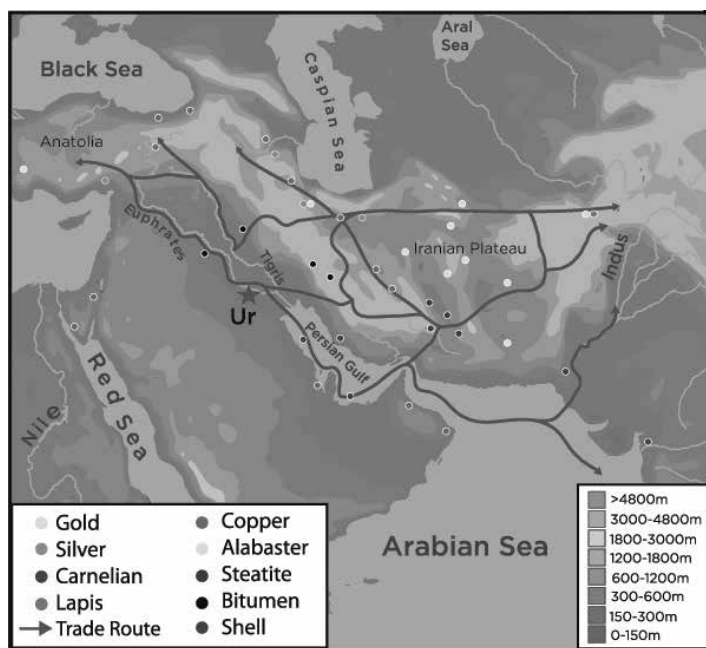


図2 シュメール・アッカド期のメソポタミアの交易ルート⁽¹⁷⁾

紀元前 550 年から西暦 651 年までの千年に渡るペルシャ帝国は、この時期の海洋交易の中心でもあったと考えられる。ペルシャ帝国の歴代の王朝（アケメネス朝・アルケサス朝・サーサーン朝）で公用文字⁽¹⁹⁾として用いられていたのは、アラム文字⁽²⁰⁾であるが、アルケサス朝のペルシャ（パルティア帝国：Parthian Empire とも呼ばれている）では、アラム文字がさらに簡略化されたパフラヴィー文字（Pahlavi scripts：紀元前 2 世紀～7 世紀）⁽²¹⁾ およびその後継で、アヴェスター教の聖典の記述に用いられたアヴェスター文字（Avestan alphabet：4 世紀～10 世紀）⁽²²⁾ も、インドの諸文字を形成するときに影響を与えたと考えられる。アラム文字・パフラヴィー文字は、子音を中心に表現するアブジャッドであるが、アヴェスター文字は母音も標記するアブギダになっている。ただし、アヴェスター文字は、後世に作られたものなので、時代的にはブラーフミー文字の方が先行しており、逆にブラーフミー文字の影響を受けていると考えられる。

(17) Brandon Huebner, “Ep. 002 - Surplus Food, Big Buildings, and Power Hungry Lugals,” The Maritime history, 2014, <http://maritimehistorypodcast.com/ep-002-surplus-food-big-buildings-power-hungry-lugals/>

(18) Nicole Boivin and Dorian Q. Fuller, “Shell Middens, Ships and Seeds: Exploring Coastal Subsistence, Maritime Trade and the Dispersal of Domesticates in and Around the Ancient Arabian Peninsula,” *Journal of World Prehistory*, Springer, Vol. 22, No. 2, 2009, pp. 113-180.

(19) 途中、アレクサンドロス大王の遠征を受けているので、セレコウス朝においてはギリシャ文字も公用文字として用いられている

(20) https://en.wikipedia.org/wiki/Aramaic_alphabet

(21) https://en.wikipedia.org/wiki/Pahlavi_scripts

(22) https://en.wikipedia.org/wiki/Avestan_alphabet

3. カローシュティー文字の形成

カローシュティー文字 (Kharosthi script)⁽²³⁾ は、アラム文字 (Aramaic script) からの影響があることがわかっている。カローシュティー文字については、紀元前 400 年頃から西暦 400 年頃の間で、アフガニスタン東部・パキスタン北部に跨がるパキスタン北西部のペシャーワル渓谷を中心とした地方で用いられていたガンダーラ語 (Gāndhārī)⁽²⁴⁾ を表わすために用いられていた。なお、古代ガンダーラ王朝自体は、紀元前 750 年から紀元前 580 年まで続いている。カローシュティー文字は、日本語 Wikipedia に拠ると、「紀元前 6 世紀～紀元前 5 世紀ころ、ダレイオス 1 世によってインダス川以西のアケメネス朝の属州となった地域の言語を表現するために、ブラーフミー文字を知っているものが、アラム文字を借用して、便宜的に表記するために考案したものと考えられている。」⁽²⁵⁾ と標記されている。この主張で引用されているのは、岩村忍の『文明の十字路口＝中央アジアの歴史』⁽²⁶⁾ の 68 頁が出典とされているが、英語版の Wikipedia に拠るとスリランカのジャーナルに出された論文⁽²⁷⁾ が出典とされている。

Aramaic	<i>Ālap</i>	<i>Bēth</i>	<i>Gāmal</i>	<i>Dāloth</i>	<i>Hē</i>	<i>Waw</i>	<i>Zain</i>	<i>Khēth</i>	<i>Ṭēth</i>	<i>Iodh</i>	<i>Kāph</i>
	𐤀	𐤁	𐤂	𐤃	𐤄	𐤅	𐤆	𐤇	𐤈	𐤉	𐤊
Kharosthi	<i>a</i>	<i>ba</i>	<i>ga</i>	<i>da</i>	<i>ha</i>	<i>va</i>	<i>za</i>	<i>gha</i>	<i>tha</i>	<i>ya</i>	<i>ka</i>
	𑀀	𑀁	𑀂	𑀃	𑀄	𑀅	𑀆	𑀇	𑀈	𑀉	𑀊

Aramaic	<i>Lāmadh</i>	<i>Mem</i>	<i>Nun</i>	<i>Semkath</i>	<i>Ghē</i>	<i>Pē</i>	<i>Ṣādhē</i>	<i>Qoph</i>	<i>Rēš</i>	<i>Šin</i>	<i>Taw</i>
	𐤌	𐤍	𐤎	𐤏	𐤐	𐤑	𐤒	𐤓	𐤔	𐤕	𐤖
Kharosthi	<i>la</i>	<i>ma</i>	<i>na</i>	<i>śa</i>	<i>e</i>	<i>pa</i>	<i>sa</i>	<i>kha</i>	<i>tha</i>	<i>śa</i>	<i>ta</i>
	𑀌	𑀍	𑀎	𑀏	𑀐	𑀑	𑀒	𑀓	𑀔	𑀕	𑀖

図 3 アラム文字とカローシュティー文字の比較⁽²⁸⁾

(23) <https://en.wikipedia.org/wiki/Kharosthi>

(24) https://en.wikipedia.org/wiki/Gandhari_language

(25) <https://ja.wikipedia.org/wiki/カローシュティー文字>

(26) 岩村忍, 『文明の十字路口＝中央アジアの歴史』, 講談社学術文庫, 講談社, 2007.

(27) Dias, Malini, and Das Miriyagalla. "BRAHMI SCRIPT IN RELATION TO MESOPOTAMIAN CUNEIFORM." *Journal of the Royal Asiatic Society of Sri Lanka*, vol. 53, 2007, pp. 91-108.

(28) https://en.wikipedia.org/wiki/Aramaic_alphabet アラム文字の文字名を引用

各文字の比較してみると、いくつかの文字は、ほぼそのまま踏襲されているが、文字によっては、180度あるいは左右鏡像のように形で変更されているものもある。また、表わす音の対応が変更されているものもある。これ以外に、カローシュティー文字では、母音の5音を表わすためと、それぞれの音節を表わすための母音記号が追加されている。また、子音についても、アラム文字にはない音を表わすための文字が追加されている⁽²⁹⁾。また、上記の比較表は、WindowsのSegoe UI Historicフォントを使っているが、GoogleのNoto Sans Kharoshthiフォントでは字形が微妙に違っており、フォントによって比較の印象についても少し異なる。下図に示すように、ギリシャ人の支配下にあったインド・グリーク朝（紀元前200年～西暦10年）のメナンドロスI世（在位紀元前155年～紀元前130年）の時代における、表面がギリシャ文字で裏面がカローシュティー文字で書かれた銀貨もあり、パキスタン北西部のガンダーラ地方がペルシャ帝国セレコウス朝支配下以降もギリシャ人の配下にあり、ギリシャ文字が流入した時代にはカローシュティー文字が日常的に使われていたことが伺える。



図4 Silver bilingual tetradrachm of Menander I⁽³⁰⁾

4. ブラーフミー文字の形成

インドには、先に述べたように、インダス文明の担い手であったドラヴィダ諸語を話す民族が先住しており、アーリア人の南下によって、南インドに移住したと考えられているが、ガンジス川周辺でブラーフミー文字が形成された時代には、既にアーリア人が北インドに在住し、十六大国 (Solaha Mahājanapadas) と呼ばれる諸王国を形成していた。ブラーフミー文字 (Brāhmī script)⁽³¹⁾ は、それらの諸王国の中でガンジス川下流域のマガダ国 (Magadha) において紀元前325年に興ったマウリヤ朝 (Maurya Empire)⁽³²⁾ が北インドを統一した際に用いられていたサンスクリット語 (Sanskrit)⁽³³⁾、および民衆語であるプラークリット (Prakrit)⁽³⁴⁾ を表わすために作られた文字であると考えられている。ブラー

(29) <https://en.wikipedia.org/wiki/Kharosthi>

(30) <https://en.wikipedia.org/wiki/Kharosthi#/media/File:MenanderCoin.jpg>

(31) https://en.wikipedia.org/wiki/Brahmi_script

(32) https://en.wikipedia.org/wiki/Maurya_Empire

(33) <https://en.wikipedia.org/wiki/Sanskrit>

(34) <https://en.wikipedia.org/wiki/Prakrit>

フミー文字は、北インド・南インドおよび東南アジアの諸言語の文字の始祖とされている。カローシュティー文字の後継がまったくない状況と対照的であり、これは紀元前 305 年にマウリヤ朝の Chandragupta 王がペルシャ帝国セレコウス朝を破り、ガンダーラ地方を配下に収めたことに起因するとも考えられる。前節で述べたようにカローシュティー文字は、その後もガンダーラ地方を中心に使われているのであるが、この時期の北西インドは、アフガニスタンにあったギリシャ人による Greco-Pactria 王国（紀元前 255 年頃～紀元前 130 年頃）の侵入により、ギリク朝が興り、その後大月氏の諸侯である貴霜翁侯、Kujula Kadphise（在位西暦 30 年～80 年）によりクシャーナ朝（西暦 30 年～375 年）が興る。この王朝までは、北インドではカローシュティー文字が使われていたが、その後北東部に興ったグプタ朝（西暦 319 年～550 年）によって北インドが再度統一される（西暦 450 年）ことによって、北インドでの公用文字がカローシュティー文字からブラーフミー文字に置き換わり、最終的にカローシュティー文字が駆逐されてしまったのではないかと考えられる。

ブラーフミー文字は、フェニキア文字（Phoenician alphabet）からの借用があることが定説になっている⁽³⁵⁾。この定説は、Georg Bühler が提唱したフェニキア文字との類似性の指摘⁽³⁶⁾が根拠になっている。フェニキア文字との類似性については、後ほど検証するが、この背景を考えると、マウリヤ朝以前にも海上交易によって、フェニキア文字がインドの西部の沿岸から北部、南西部に流通しており、ブラーフミー文字の形成もフェニキア文字の流通経路から派生して興ったのではないかと考えられる。フェニキア自体は主に地中海を通じての海上交易を行っていたが、紅海を通じてアラビア半島南部の航路を介しても、直接西インドとの交易も行なわれていたのではないかと推測できる⁽³⁷⁾。フェニキア文字を基本としてブラーフミー文字が形成されたという仮説に立つならば、フェニキアとの交易の流通経路を通して、フェニキア文字を参照として、カローシュティー文字と同様にアブギダとしての形成原理を採り入れて、インドの西部沿岸から、北東部・南西部において、ブラーフミー文字の原形となる文字が考案され、最終的にマウリヤ朝で確定されたのではないだろうか。

フェニキア文字は、子音を中心としたアブジャド（Abjad）あるいはローマ字やギリシャ文字のアルファベットの始祖であるのに対して、ブラーフミー文字は子音記号を中心に母音記号を組み合わせるアブギダ（Abugida/Alpha-syllabary）となっている。このようなことから、ブラーフミー文字の形成については、フェニキア文字との類似性を指摘する以外にも、いくつかの仮説が提唱されている。ここでは、英語版の Wikipedia で紹介されているいくつかの仮説の概要を紹介するに留める。フェニキア文字起源説も含めて、これら

(35) ルイ＝ジャン・カルヴェ (Louis-Jean Calvet), 『文字の世界史』(Histoire de l'écriture), 矢島文夫監訳, 河出書房新社, pp. 261, 1998 (original by Plon, 1996), pp. 151-154.

(36) Georg Bühler, "On the Origin of the Indian Brahma Alphabet," Strassburg K.J. Trübner, 1898, <https://archive.org/details/onoriginofindian00bhuoft>

(37) Nicole Boivin and Dorian Q. Fuller, 前掲論文

の仮説の検証は、サロモン (Richard Salomon)^(38, 39)とファルク (Harry Falk)⁽⁴⁰⁾によってなされている。

象形文字を音声文字として使用したものという仮説がブラーフミー文字の起源をめぐる学説が興った当初から提唱されていた⁽⁴¹⁾が、ビューラーはその証拠は示されていないと指摘しているし、サロモンはこの仮説は間違っていると指摘している。この象形文字起源説とは別に、インダス文字との類似性を提唱する仮説がある^(42, 43)。この仮説についても、十分な証拠がない、およびインダス文明からブラーフミー文字の形成までの北インドにおける様々な王朝の歴史が捨象されているとして1990年代に否定されている。フェニキア文字に替わる別のセム系言語の文字としてベルシャ帝国での公用文字であったアラム文字から借用しているという学説が一般的であることもサロモンは認めている。トリガー (Bruce G. Trigger) は、アラム文字に地域的な変更を加えてブラーフミー文字が形成され、北西インドではカローシュティー文字が特に仏教の聖典を記述するのに使われていたが、スリランカやそれ以外のインドでは、紀元前5～4世紀頃からブラーフミー文字が使われていたのではないかと指摘している⁽⁴⁴⁾。アラム文字起源説の問題点は、何故、アラム文字からカローシュティー文字とブラーフミー文字の2つの文字が作られたのかについて説明ができないこと、上記の指摘のように、アラム文字とブラーフミー文字はかなり違っており、セム系言語のアブジャッドとしてのフェニキア文字の方が似通っているという点にある。

サロモンは、ビューラーのフェニキア文字起源説についても、歴史的・地理的な繋がり
の弱さ、および年代記的な正当性に欠けるとしている。また、ビューラーの仮説の提唱の
後、マウリヤ朝のアラム語の碑文が発見されたことにより、カローシュティー文字を基礎
としてブラーフミー文字が形成されたのではないかとという仮説に置き換わってきている。
しかしながら、2つの文字が必要だった説明にはなっていないし、この仮説についても、
サロモンは、カローシュティー文字とブラーフミー文字との共通部分に比べて、違いの方
が大きすぎるという指摘をしている。

(38) Richard Salomon, "On The Origin Of The Early Indian Scripts: A Review Article," *Journal of the American Oriental Society* 115.2, 1995, pp. 271-279.

(39) Richard Salomon, "Indian Epigraphy: A Guide to the Study of Inscriptions in Sanskrit, Prakrit, and the other Indo-Aryan Languages," Oxford University Press, 1998, ISBN 978-0-19-535666-3.

(40) Harry Falk, "Schrift im alten Indien: ein Forschungsbericht mit Anmerkungen (in German)," Gunter Narr Verlag, 1993.

(41) Alexander Cunningham, *Corpus Inscriptionum Indicarum*. Volume 1, 1877.

(42) G.R. Hunter, "The Script of Harappa and Mohenjodaro and Its Connection with Other Scripts," London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd, 1934, <https://ufdc.ufl.edu/AA00013642/00001>

(43) John Marshall, "Moheno-daro and the Indus civilization: being an official account of archaeological excavations at Moheno-daro," originally carried out by the government of India between the years 1922 and 1927, Asian Educational Services, 1931, p. 423, ISBN 978-81-206-1179-5, https://books.google.co.jp/books?id=Ds_hazstxY4C&pg=PA423

(44) Bruce G. Trigger, "Writing Systems: a case study in cultural evolution," in Stephen D. Houston (ed.), "The First Writing: Script Invention as History and Process," Cambridge University Press, 2004, pp. 60-61.

Phoenician	Aramaic	Value	Brahmi	Value
𐤀	𐤁	*	𑀀	a
𐤁	𐤂	b [b]	𑀁	ba
𐤂	𐤃	g [g]	𑀂	ga
𐤃	𐤄	d [d]	𑀃	dha
𐤄	𐤅	h [h], M.L.	𑀄	ha
𐤅	𐤆	w [w], M.L.	𑀅	va
𐤆	𐤇	z [z]	𑀆	ja
𐤇	𐤈	ḥ [ḥ]	𑀇	gha
𐤈	𐤉	t [tʰ]	𑀈	tha
𐤉	𐤊	y [j], M.L.	𑀉	ya
𐤊	𐤋	k [k]	𑀊	ka
𐤋	𐤌	l [l]	𑀋	la
𐤌	𐤍	m [m]	𑀌	ma
𐤍	𐤎	n [n]	𑀍	na
𐤎	𐤏	s [s]	𑀎	ṣa
𐤏	𐤐	ʿ [ʿ], M.L.	𑀏	e
𐤐	𐤑	p [p]	𑀐	pa
𐤑	𐤒	ṣ [ṣʰ]	𑀑	ca
𐤒	𐤓	q [q]	𑀒	kha
𐤓	𐤔	r [r]	𑀓	ra
𐤔	𐤕	š [ʃ]	𑀔	śa
𐤕	𐤖	t [t]	𑀕	ta

図5 フェニキア文字・アラム文字とブラーフミー文字との比較⁽⁴⁵⁾

(45) https://en.wikipedia.org/wiki/Brahmi_script#CITEREFBühler1898

図5を見ると、フェニキア文字の方がアラム文字よりもブラーフミー文字に近い文字が多いのがわかる。カローシュティー文字と同様に、フェニキア文字を180度回転させたと思われる文字がブラーフミー文字にある。これは、フェニキア文字やアラム文字が右から左に書記する文字であったのに対して、カローシュティー文字やブラーフミー文字が左から右に書記する文字であることに起因するのではないかと考えることができる。ブラーフミー文字がセム系言語のアブジャッドからの発展によるものであるという証拠として、ブラーフミー文字で書かれた Lipi(書字・書道作品)⁽⁴⁶⁾は、古代ペルシャの Dipi という言葉から来ているのではないかという指摘もされている⁽⁴⁷⁾。なお、この Dipi という言葉もエラム語からの借用語であるとされている⁽⁴⁸⁾。

更に、ファルクが提唱したギリシャ文字との類似性を指摘する仮説⁽⁴⁹⁾もあるが、ブラーフミー文字の形成は、アレキサンドロス大王の遠征以前にされているので、ギリシャ文字の影響があったかどうかは微妙である。ファルクは、アラム文字からブラーフミー文字の原形ができて、その発展系としてギリシャ文字の影響があったのではないかと主張している。サロモンは、これに対して、ギリシャとブラーフミー文字の音価の捉え方が異なること挙げて、この仮説に疑問を呈している。ビューラーと異なり、ファルクはギリシャ文字影響仮説の具体的な根拠を示していない。いずれにせよ、紀元前326年のアレキサンドロス大王のインド遠征以降のギリシャ文字が流入していた時期には、ギリシャ文字に加えて、カローシュティー文字とブラーフミー文字の両方が併用⁽⁵⁰⁾されていたことが、表面がギリシャ文字、裏面がブラーフミー文字で刻印された銀貨があることからわかっている。表面がギリシャ文字、裏面がカローシュティー文字の銀貨は、図4で示した通りである。図6は、バクトリア王国のアガソクレスI世ダイカイオス (Agathocles I Dikaios : 在位紀元前190年～紀元前180年)⁽⁵¹⁾の時代に用いられていた各面に両文字が刻印された貨幣の両面である。



図6 Greek-Brahmi coinage of Indo-Greek King Agathocles⁽⁵²⁾

ブラーフミー文字の碑文としては、紀元前300～210年頃のアショーカ法勅 (Edicts of Ashoka) の円柱の碑文⁽⁵³⁾がインド各地に残されている。

5. 初期南インド文字の形成

タミル-ブラーフミー文字 (Tamil-Brahmi)⁽⁵⁴⁾ は、Tamil 文字あるいは Damili 文字としても知られているが、ブラーフミー文字を使って古タミル語 (Old Tamil: 紀元前3世紀~紀元前1世紀)⁽⁵⁵⁾ の洞窟に岩に彫られた碑文を書き記した文字である。古タミル語よりも前の言語は、南ドラヴィダ祖語 (Proto-South Dravidian language)^(56, 57) と呼ばれており、古タミル語以外にも南インドのドラヴィダ諸言語の祖語として位置づけられている。南ドラヴィダ祖語は、遅くとも紀元前7世紀には存在していたと考えられているが、その証拠は乏しい。更に、第1節でエラム音節文字との関連で述べた北部ドラヴィダ語であるブラフイー語も含む、ドラヴィダ祖語 (Proto-Dravidian language: 紀元前4千年紀~紀元前3千年紀頃)⁽⁵⁸⁾ は、現在判明しているドラヴィダ諸言語からの、言語的な再構成の仮説に過ぎないが、言語上の推察から、紀元前3千年紀から紀元前2千年紀に渡って、デカン高原やインド半島南部の各地に新石器・銅器を使った文化の痕跡があったこと、インダス文明 (Indus Valley Culture) およびインダス川河口 (シュメールの記述では Meluhha とされている) に住む人々が、シュメールの記録に残っていること、ドラヴィダ祖語にシュメール語からの借用があることが主張されており⁽⁵⁹⁾、南ドラヴィダ祖語にもシュメール語あるいはエラム語の音節文字の影響が入っていると考えられる。ペルシャ湾・アラビア海沿岸を通しての海上交易によって、図2に示した鉱石などについてシュメール時代から西南インドとの交易があったのではないかと考えられている。

タミル-ブラーフミー文字に戻ると、この文字で岩壁に書かれた碑文は、タミル・ナードゥ (Tamil Nadu) 州やケラール (Kerala) 州あるいはスリランカに約70の碑文が発見されており、民衆語であるプラークリット (Prakrit) として記述されている⁽⁶⁰⁾。また、紅海を通じた海上交易が盛んに行なわれた証拠⁽⁶¹⁾として、タミル-ブラーフミー文字が

(46) <https://en.wikipedia.org/wiki/Lipi>

(47) Eugen Julius Theodor Hultzsch, "Corpus Inscriptionum Indicarum v. 1: Inscriptions of Asoka," Oxford: Clarendon Press, p. xlii, 1925.

(48) Jan Tavernier, "The Case of Elamite Tep-/Tip- and Akkadian Tuppu," Iran, 45: 57-69. doi:10.1080/05786967.2007.11864718. S2CID 191052711, 2007.

(49) Harry Falk, 前掲論文

(50) Malini Dias and Das Miriyagalla, 前掲論文

(51) https://en.wikipedia.org/wiki/Agathocles_of_Bactria

(52) https://en.wikipedia.org/wiki/Brahmi_script#/media/File:AgathoklesCoinage.jpg

(53) https://en.wikipedia.org/wiki/Edicts_of_Ashoka

(54) <https://en.wikipedia.org/wiki/Tamil-Brahmi>

(55) https://en.wikipedia.org/wiki/Old_Tamil

(56) Bhadriraju Krishnamurti, "The Dravidian Languages," Cambridge University Press, 2003, ISBN 978-1-139-43533-8.

(57) Mikhail Sergeevich Andronov, "A Comparative Grammar of the Dravidian Languages," Otto Harrassowitz, pp. 299, 2003, ISBN 978-3-447-04455-4.

(58) https://en.wikipedia.org/wiki/Proto-Dravidian_language

(59) Jane R. McIntosh, 前掲書

オマーンの古代遺跡の倉庫で発見された瓶の欠片に記載されていることが報告されている⁽⁶²⁾。また、その後も交易が続いていた証拠として、エジプトの Quseir-al-Qadim (シナイ半島の先にある紅海西側沿岸の街) において碑文の一部が発見されており、西暦1世紀～2世紀のものと推定されている⁽⁶³⁾。

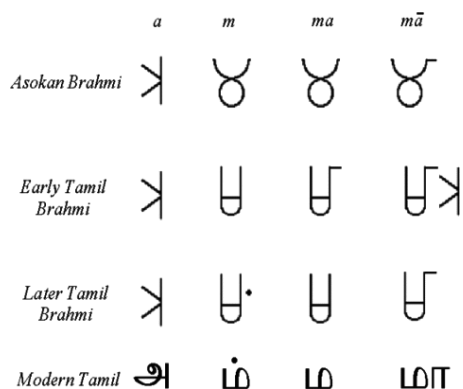


図7 タミルブラーフミー文字とブラーフミー文字との比較⁽⁶⁴⁾

図7は、ブラーフミー文字とタミルブラーフミー文字（前期・後期）、および現代のタミル文字との比較になっている。サロモンに拠ると、タミルブラーフミー文字は、北インドで用いられていたブラーフミー文字と比較して、4つのドラヴィダ語の発音に必要な文字が含まれている⁽⁶⁵⁾。逆に、海上交易の視点から考えれば、フェニキア文字などを参考にして、タミルブラーフミー文字が先行して形成され、北西部に伝わるに従って、ブラーフミー文字に収斂されていく仮説があっても面白いのではないかと考えられる。陸上路を通して、アラム文字からカローシュティー文字が形成され、海上路を通して、フェニキア文字などからタミルブラーフミー文字を経て、ブラーフミー文字が形成されたとなれば、セム系の文字から2つのインドのアブギダ文字が成立した理由にもなり得る。また、シュメール時代からインド西南部との交易が存在したことにより、シュメールやエラムの音節文字がインドのアブギダ文字の形成に影響を及ぼしたのではないかという仮説も建てるのが可能だろう。中東・インドの研究者がこの分野で活発に研究成果を発表して

(60) Iravatham Mahadevan, "Early Tamil Epigraphy," Harvard University Department of Sanskrit and Indian Studies, 2003, pp. 91-94. ISBN 978-0-674-01227-1; Iravatham Mahadevan, "Tamil-Brahmi Inscriptions," State Department of Archaeology, Government of Tamil Nadu, 1970, pp. 1-12.

(61) Frederick Asher, Matthew Adam Cobb (ed.), "The Indian Ocean Trade in Antiquity: Political, Cultural and Economic Impacts," Taylor & Francis Group, 2018, pp. 158. ISBN 978-1-138-73826-3.

(62) T. S. Subramanian, "Discovery in Oman," THE HINDU, 2012, Chennai, India.

(63) John Guy, Angela Schottenhammer (ed.), "The Emporium of the World: Maritime Quanzhou, 1000-1400," BRILL, 2001, pp. 283 with footnote 2. ISBN 90-04-11773-3.

(64) https://en.wikipedia.org/wiki/Tamil-Brahmi#/media/File:Tamil_brahmi.png

(65) Richard Salomon, 1998, 前掲書

いるので、今後そのような仮説が出ることも期待したい。

（2021.9.30 受稿，2021.11.18 受理）

〔抄 録〕

この一連の研究ノートにおいては、断片的な音節文字の系譜 (Fragmented genealogies of syllabaries) ということによって連載をしているが、シュメールの楔形文字からインドのアブギダと分類される一連の文字群には、音節文字としての繋がりを感じさせるものがある。特に東西アジア全体で、断片的で孤立的に存在する音節文字には、埋もれている継承があるのではないかという問題意識の下に、音節文字の埋もれた継承を洗い出すことによって、西の果てにあるシュメールから東の果てにある日本まで、音節文字としての統一的な系譜が導き出されることを企図している。第3回目の本稿においては、メソポタミアあるいは古代ペルシャから、インドの初期の文字が形成された起源についての諸説の紹介をする。